

松蔭 校長室だより

—校長から保護者の皆さまへのメッセージです—

2018年3月1日 発行

松蔭中学校・高等学校
校長 浅井直光

立ちはだかる壁をとり除いて。 (エフェソの信徒への手紙 5:11)

「セレンディピティー」を手に、「ダイバーシティ」のなかに生きる

毎週、華道部の皆さんが校長室にお花を届けてくれます。先月上旬には春の季語、山茱萸（さんしゅゆ）の小枝をあしらった作品が早春の薫りを漂よわせました。秋にはグミのような実を結び、ヤマグミとも呼ぶそうですが、厳寒の季節に咲く黄色の可憐な花々に心が温かくなりました。3月の声を聞き、校庭を吹き渡る風に心なしか春の訪れを感じ始めると、高校卒業式の日を迎えます。今年度も3月1日、50年ぶりに再開した高校入試による入学生を含めて、151名の卒業生を送り出しました。式辞では「セレンディピティー」と「ダイバーシティ」の言葉を取りあげ、人生の様々な局面で大切にしてほしいと、旅立ちのエールを送りました。その一部を紹介します。

皆さんは将来、どのような人生を歩みたいと考えているのでしょうか？ 10年後、20年後の自分の未来の姿を想像することは難しいものですが、希望通り、思い描いた通りの人生を目標として夢を実現しようと努力することは大切です。

私は想像しています。グローバル化がすすむこの世界のどこかで、いずれかの職業に就いて社会に貢献している姿を。日本国内の社会・文化のなかで、海外の多様な異文化のなかで人生を懸命に歩んでいる未来の姿を。海外で暮らす長期滞在者や永住者は、平成の時代とともに60万人から200万人へと増加しました。3ヶ月以上の長期滞在者数は、人の入れ替わりも含めると、この20年間で850万人を超え、14人に1人は海外生活を送ったことになり、若い世代でその割合は格段に多くなっています。松蔭の卒業生のなかにも海外で生活し、働いている方は少なくありません。先日、米国サンフランシスコの企業で、会計担当のマネージャーを務めておられる卒業生が一時帰国し、母校に立ち寄られました。彼女は、日本の若い女性そして松蔭の後輩達に身に付けてほしい力は、コミュニケーションの道具としての英語と、自ら問題を解決しようとするリーダーシップだと話しておられました。皆さんのなかからも、彼女のように世界各地で活躍する人が生まれることでしょう。

一方で、インバウンドと呼ばれる海外から日本への旅行者数は、年間3千万人に迫る勢いとなっています。京都などの観光地だけでなく、三宮やハーバーランドにも日本語を話さない外国の方が多数訪れています。外国人従業員の姿をホテルやコンビニで見かけることも珍しいことではなくなりました。今後の規制緩和により外国人労働者はますます増えていくことでしょう。日本で、そして世界で、皆さんは巡り会う人々と関わりながら人生を歩いていくのです。将来の姿を想像しながら、

これから2つの言葉についてお話ししたいと思います。

その1つめはセレンディピティーという言葉です。最近よく見聞きするようになりまして、知っている人がいるでしょう。映画や歌のタイトルにもなっていましたし、ある雑誌には「セレンディピティーを磨くための心がけ」という特集がありました。意味は、幸運をつかみ取る能力、ふとしたきっかけから幸せをつかむ力などと訳されています。幸せな人生をつかむ秘訣の1つにセレンディピティーがあるようです。卒業生の皆さんにも、この幸運をつかみ取る力をぜひ身に付けてほしいと願っていますが、私には、校内ですれ違う時にすでにセレンディピティーを持っている人がいると感じる瞬間があります。それはどのような時かわかるのでしょうか？ それは「笑顔」で挨拶する時なのです。「こんにちは」「おはようございます」の声と共に視線を交わし、明るい「笑顔」を皆さんの表情に見ることができた時なのです。その時の私の気持ちは、人として女性として立派に成長した皆さんの姿をととても誇らしく思うと同時に、何だか浮き浮きするような気分になり、嬉しさがこみ上げ、私自身の心が開かれたような気がするのです。その生徒が持っているセレンディピティーが、私をそのように感じさせたのだと思いますし、その生徒が人生で巡り会う多くの人、私同様の思いを持つことは間違いありません。心が開かれると人は安心し、心の距離を縮め、信頼感によってつながりを深めていきます。このことは、オープンハート、オープンマインドの精神を松蔭で身に付けている皆さんには、簡単に理解できることではないでしょうか。松蔭生は、セレンディピティーの基礎資格を十分に備えていると信じています。笑顔と共に挨拶をし、セレンディピティーを備えた女性として人生を歩んでいただきたいと思っています。

2つめの言葉はダイバーシティです。Blue Earth Projectのテーマは生物多様性（Biodiversity）でしたが、人のあり方の多様性（Humandiversity）を認めようとする姿勢を持つことが、皆さんの人生では重要だということです。人のあり方の多様性とは、性別や年齢、障害や病気があること、学歴や職歴、そして人種、国籍、民族、宗教など、各個人でバックグラウンドの異なる人々が、1つの集団や組織に存在し、協同している、ということです。人、物、情報という観点から見るとグローバル社会は、歴史にない形で国境の壁を低くし、物と情報に関しては既にボーダーレスとなり、近年では「世界のフラット化」という言い方がされることもあります。残るは人と人の関わり合いなのです。生物多様性が地球にとって重要であるように、人のあり方の多様性を認め合うことは、人類が平和に存続する上でのポイントとなります。自国優先主義は、グローバル化の大きな流れのなかの一時的な反動と私は考えています。すでに世界中の多くの企業では、Humandiversityを経営理念の1つに据え、人の多様性を大切な価値として活かすことで競争力を高めよう、という考え方が一般的になっています。自分とは異なる人との違いを認め、その存在を尊重し共に生きる。ダイバーシティを認めることは、分け隔てなく謙虚に他者と向き合おうとする姿勢であり、自らの人間性を問うことにもなりますが、これまた、オープンハート、オープンマインドの精神を松蔭で身にまとう皆さんには、容易に理解し、実践できることなのではないでしょうか。

セレンディピティーを笑顔の挨拶で手にして、ダイバーシティを認め合い、グローバル社会を生き抜く。2つの言葉をこれからの人生のキーワードとして記憶に留めておいていただきたいと思っています。(2018年3月1日松蔭高等学校卒業式学校長式辞より)

(裏面に続く)

学校のチャペルの名称がレオノラチャペルに決まりました



学校のチャペル（礼拝堂）には名称がありませんでしたが、このたび1927（昭和2）年から1941（昭和16）年まで松蔭で聖書と英語を担当していた女性宣教師、レオノラ・エディス・リー先生（以下、リー先生）にちなみ、レオノラチャペルと呼ぶことにしました。リー先生はカナダで生まれ、英国で教育を受けた後に31歳で来日、松蔭の教員になりました。その2年後に学校は現校地に移転し、彼女は学校運営の中心メンバーの一員として、理事や会計の仕事も担当しました。しかし1940年、礼拝や聖書の授業が禁じられ、翌年12月8日の真珠湾攻撃で日本と米国、英国が戦争を始めると、松蔭を退職せざるを得ませんでした。周囲の宣教師たちが拘束されたり、投獄されるという状況の下で、最後の日英・日米の外国人交換船に乗船することも叶（かな）いませんでした。スパイの疑いで特高（政治犯や思想犯を取り締まる機関。特別高等警察の略）に自宅捜索を受け、自宅軟禁のような状態でしたが、彼女と同様に本国へ戻れなかった外国人への食料支給など、積極的にボランティア活動を行っていました。

戦後、松蔭が宗教教育の再開を決定すると復職し、復興に向けた教育方針として「英語・芸術重点主義」を打ち出しましたが、その精神は現在の松蔭にも脈打っています。その後、在日外国人子弟のための国際学校「聖ミカエル国際学校」を開校し、校長に就任しました。「英語の松蔭プロジェクト」の一環で、高校生がインターナショナルスクールのアシスタントとして活動中ですが、それがこの学校です。併設短大が松蔭の西隣に設置されると教授として熱心に指導し、生徒や学生に「ノーティーガールズ（Naughty Girls=やんちゃなお嬢さんたち）」と声をかける一方で、「レディー」としての生き方も教えていました。当時の学校には寮があり、ある寮生の手記を読むと、週1回の英語だけの食事会の時には膝に辞書を置きながら、それはそれは緊張する時間だったと述懐しています。リー先生の人生をたどると、苦難の日々を生き抜く姿勢とキリスト者として自らを神にゆだねた生き方、そして持ち前の気品とおおらかさに感銘を受けます。これまで紹介する機会がなかったリー先生ですが、チャペル命名をきっかけに生徒たちが、一女性の生き方に学び、気付きを得ることを願っています。

リー先生の資料を読んでいると、戦後間もなく彼女が記した一文に目が留まりました。

「（戦前の）松蔭は完全に成熟したクリスチャンスクールであった。今後、日本が物質的安定を取り戻すと以下の事柄を考えることになるが、（中略）どのようにして講義形式をとらずに日本の高校生を教育することができるかについて、松蔭はこの分野の指導的な位置に立つ可能性を持っていると信じる。」

70年を経た今、全国の学校では、アクティブラーニングなど講義形式による受け身の授業ではなく、主体的な学びの姿勢や対話を重視し、自ら課題を発見する授業に転換しようという動きが本格化しています。学校改革に取り組む現在の松蔭への、リー先生からの叱咤激励と受け止めています。



聖ミカエル国際学校校長室のリー先生

Blue Earth Project もグローバル化 英語・韓国語で発信

2学期までの高1、高2生の活動に引き続き、3学期は進路が確定している47名の高3生が取り組んでいます。昨年夏の校長室だよりでもお伝えしていましたが、今年度のテーマは生物多様性の保全。須磨水族館、ハーバーランドUMIE、西宮ガーデンズの3会場での啓発イベントも盛況のうちに終わることができました。今回初めて「グローバルチーム」を発足させ、英語と韓国語による活動紹介に取り組み、2006年度のプログラム開始以来、初めて生徒による英語訳、韓国語訳の作業を行いました。完成した英文の活動紹介リーフレットは、イベントで配布するとともに環境省やOECD日本イノベーション教育ネットワークをはじめ関連団体に届ける予定です。韓国大邱市の信明高校訪問団が来校した際には、韓国語によるプレゼンを行いました。環境問題は一国の努力だけでは解決できなくなっており、まさにグローバルな課題です。Blue Earth Projectは「女子高生が社会を変える」をスローガンに、松蔭から全国の高等学校に広がりました。今回の英語と韓国語による取り組みをきっかけに世界へと発信し、「女子高生が世界を変える」と言えるほどにグローバル教育の一環として取り組みたいと考えています。

（下は生徒が作成した、活動について紹介する英文リーフレットの一部です）

Blue Earth Project (BEP) is an activity that female high school students in all parts of Japan carry out. The students think of familiar actions they can do to solve various global environmental problems. After that, they go to many cities and promote those actions to ordinary people with the slogan "Female High School Students Can Change Society!"

BEP was started in 2006 by Shoin High School, located in Kobe. Now, over 200 female high school students from all over Japan including Miyagi, Fukushima, Tokyo, Yokohama, Kawasaki, Kamakura, and Nagoya are participating in BEP and are working together.

BEP has won many prizes including the Minister of the Environment Award, the 13th Annual Japan Water Prize (The Future Award), and the 2nd FOOD NIPPON AWARD from the Enlightenment category award (given by the Ministry of Agriculture). Not only has BEP received these awards, but has received media attention and has been asked to do numerous interviews. This year BEP was certified as a business which the United Nations Decade of Biodiversity Japan Committee (UNDB-J) recommends.

